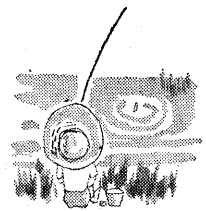


幼児教育への願い

長山篤子



現代における幼児教育の課題ということが今回の題ですが、今年度より主婦の座にある私にとって、現代における幼児教育の課題というには、あまりにも社会の緊迫した場面や、研究の場、幼児や教師との出会いの場から離れ過ぎてしまったように思い、現在の私の立場から、幼児教育界に対する私の願いを記してみることになりました。

一般的に教育の課題といいますが、人間形成ということになると思います。幼児教育の場合も同じだと思えますが、幼児教育の場合は、人間形成の初期をどう体験するかということにあると思います。人間形成の初期をどう体験するかということがその後の人間形成に大変かかわりのあることであり、教育の大

きな課題とされているところだと思います。

そこで人間初期の、ことに幼児の体験に対しては、世界的に関心が示されており、私も同じく、多いに、関心を持っています。科学の発達、進歩に伴い、早教育がさげばれ、日本においては、就学年齢を下げるとか、世界においても幼児教育における考え方を變えるとか、カリキュラムを組むとか、その扱い方の検討をするとか、さまざまな問題が投げかけられ、幼児教育が世界的に注視されてまいりました。私ももあらためて、日本の幼児教育界を見直さなければなりません。

私は現在、都会の生活から離れ、北国の田舎の生活をするようになり、あらためて、幼児教育というものについて考えさせ

られています。以前に経験した多くの問題とともに少し整理したいと思います。まず子どもの生活に対する私どもの考え方の検討、私の現在の疑問と、そして願いとに分けてみました。そのことによって人間初期の体験ということを考えてみたいと思います。

★ 子どもの生活

「自然の中での子ども」

私は今まで自然の中で生活している子どもの生活についてどんなに生き生きとしているかということは、書物で読んだり、また聞いたりしてきましたが、直接にそういった場面に触れることがありませんでした。都会で生活した自然は、ほんのわずかな自然を相手にした生活でした。フリーベルが、「人の教育」の中で次のようなことをいっていることに感動していました。

「春は、新芽を生じ、枝を出し、花咲いて、人々の心を、已に子どもの心までを歓楽と生命とで充し、人々の血潮は躍り、心臓は高鳴る。秋は……子どもの心までが希望と憧憬とに充ち満る。どっしりした冬は、人々に勇氣と活気を喚び起し、勇氣、活力、堅忍、奮発などのこの感情は子どもの情思を快活に

広げて行く……」と。

しかし、実感としてこのような経験をしたことがありませんでしたが、今、自然の中で生活している子どもの姿というものに感動し、あらためてフリーベルの言葉をかみしめています。自然の力と自分の力とをぶつけ合いながら生活し成長していくということは、どんなに、幼児の初期に体験しても、体験しすぎるといえることはないように思います。子どもたちの生活の歩調は、何の抵抗もなく、自然の歩みと一致しているようです。

自然の中で、生活する子どもの姿というものをあらためて見直さなければなりません。

私が住んでいる隣に八十六歳になられるおばあさんがいらして、こんな話をきかせて下さいました。「私は、子どもは自然の中で放つようにして育ててきました。大きなこの池のまわりは、昔はみんなリンゴ園でしたが（現在はほとんど住宅）そこにニワトリやヤギやアヒル、ブタなどを放し飼いにしています。アヒルが、子どもをつれて毎日散歩する散歩道ができており、そこを子どもがいっしょに散歩し、リンゴ園で放し飼いにしているニワトリがいつのまにかヒヨコを連れて散歩し、子どもたちがそのニワトリやブタといっしょにはいずりまわって遊

んでいたのですよ。部屋の中の襖はみんなトンネル、または、はずし、おままごとコーナーになっていました。子どもたちはその中で、いろいろなことを体験していききました。考える子どもはチャーンと考えた。あれしてはいけない、これしてはいけないといわなかったよ。あれしたいという子どもにはそうさせてみた。これしたいという子どもには、思うようにさせてみた。自然がチャーンと相手になった」という話をうかがい大変感激いたしました。今ではそうして育った十数名のお子様方が立派に社会的な活動をなさっていらっしゃいます。

北国にきて、日本の風土、土壌は素晴らしいとあらためて感じています。そして、日本の子どもたちは、こんな四季変化のある素晴らしい生活することが出来たのかと思っています。自然の中に放たれた子どもは生き生きとしています。四歳の私の娘が幼稚園の帰り道、つくしとりやタンポポとりで夢中になり、あるいは、いつまでもすわりこんでタンポポに見入っている姿をみかけます。そして「タンポポってやさしいね」「どうして」「だって、いつまでもじーとしてちょうちょをちゃんと、とまらせてあげているんだもの」「ちょうちょはうれしだいだろうな」と嘆息をつきながら語る言葉を聴き、あわただしい都市での生

活が、子どもの生活をいかに不自然にしていたかを思い知らされます。一歳三カ月になる息子は毎日毎日飽きもせず両手に石をもって川に幾度も幾度も投げに行きます。ポチャンという音に身を躍らせ喜び、次に流れる水のようにすに見入っています。おとなの干渉の多くなつた今日、「自然がチャーンと相手になつて物事を解決してくれた」ということばには、本当に考えさせられてしまいます。

自然の中での子どもたちの生活がすべてとは思いません。子どもの生活経験は、果てしなく広がっていきます。

「粘土と子ども、製作の好きな子ども」

去年は幼稚園で粘土の遊びをよくいたしました。ドロロンコいじりは子どもたちの大好きな遊びです。大きなドロ粘土のかたまりを両手で、こねたり、板にたたきついたり、机の上に山と積んで頭の先から足の先まで粘土だらけにして粘土と夢中に取り組んでいる姿は全く壮快で、熱中している子どもの意気を、そばにいても感じさせられます。一年間の記録をみてみますと、粘土の大きな山を用意しておくだけで、その遊びの発展は、八十数種類にもなっています。お店やさん、宇宙ごっこ、海になり山になり、動物園になり、怪獣になり、乗物ごっこに

なり、自分たちの生活経験をいろいろな形で表現していきま
す。私は、粘土（ドロ粘土で油粘土などはあまり良いと思わな
い）は、子どもたちの生活にとって切り離せない大変によい遊
び道具だと思っています。

また製作活動も子どもから切り離すことのできない遊びだ
と思います。生まれおちてきた子どもは、みんな作る喜びをもち
合わせているのではないかと思うくらいです。何かのきっかけ
で、それが阻害されていない限り、子どもたちは作ることが大
好きです。大小の空箱を積み重ね、あれにしてみようか、これ
にしてみようかと考え、船になったり、素晴らしいマイホームに
なったり、望遠鏡になり、トランジスターになり、金庫、ハン
ドバッグ、カメラと、百をこえる種類のことを創り出していき
ます。

ヤクルトのビンが、今日は懐中電燈に、今日は顕微鏡に、ま
た望遠鏡にといろいろと変化していきます。それに取り組んで
いる楽しそうな喜々とした子どもの目は私たちにまで喜びを分
けてくれます。

私は以前子どものこうした製作活動だけで、（自らが空箱や
その他おとなの生活の廃品となっているものを利用して遊びと

して製作活動をしたもの）一体どのくらいの遊具を自分たちで
創り出しているだろうかと記録してみたことがあります。半年
の記録で七十種類のを創り出していました。もちろん数だ
けでなく、その一つ一つは実によく考え出され、おとなが作る
遊具よりずっとおもしろいものばかりでした。驚きをもって、
この種類を他の方に紹介しましたら、何の感動も示されませ
んでしたので（将来幼稚園の先生になろうとされる方）がっかり
したことがあります。

私は、今「自然の中の子ども」「粘土、製作をする子ども」
の姿を私の知る限り少しばかり記してみました。子どもの活
動は、おとなが制限しまた阻害しない限り、果てしなく広がっ
て行くように思います。「子どもってこんなにたくさんの活
動を自らの力でして行くのね」と語りかけても、その意味、意
義を感じられなくなっています。それよりも、おとなの文化を
子どもに何とか、植えつけようとする努力の方に重点がおか
れてしまうわけです。子どもの生活力を私どもはもう少し信じ
られないのでしょうか。子どもの生活を知る努力がもう少
し、はらわれてもよいのではないのでしょうか。

★ 疑問

さて、一般的に子どもの生活に対する私どもの考え方の検討ということ少しかり記しましたが、次に、すべての幼児教育機関が、子どものこうした生活欲に对应しているかどうかということが大変な疑問です。

世の中一般の父兄の幼稚園に対する要求に对应するためには、現代は、まず何かを子どもに教えなければならぬといった幼児教育機関の態度に対し、私たちはどのように考えたらよいのでしょうか。親（私も含めて）、特に母親というものは大變勝手なもので、子どもが自ら成長する力というものに対し、本能的に近いくらい抵抗を感じているのではないのでしょうか。「自分で成長していく」ということが信じられないから、絶えず何かを教えなければならないとあせる。特に文化の中に生活してきますと、文化生活に立ち遅れまい、また負けてはならないという意識から、一つでも多くのことを早く知って欲しいと願います。

幼稚園では、何を教わってきたのだろうかと思えます。このほりのつくり方が立派に指導されて出来上がっていれば安心します。音楽のリズムのとおり方を正確に教えてもらえたといっ

ては安心します。絵を描くことに喜びをもっている子どもの姿よりも、出来上がった絵をみてよく描けていると思えば安心します。ヤクルトのビンがさんざんいじくられ、やっこの思いで、顕微鏡になったものを見て、なんだこんなものを作ってきた、幼稚園では何も教えないのかと不平をいいます。こうした父兄の要求に絶えず耳を傾けてしまうと、また傾けなければならぬといった幼稚園の現状を私どもはどう考えたらよいのでしょうか。親の要求に对应するのでなく、子どもの生活欲に对应する幼稚園になれないというのはどこに原因しているのだろうかと疑問です。教師自身の認識不足、経営に対する問題、はては、国の方針に対する誤りなど、さまざまな問題が思ひあたります。

★ ねがい

疑問とともに、また、幼児教育に対する願いがあります。

・ 幼児とともに生活していますと、子どもの生活とか気持は、ともに生活してみなければ、本当にわかりません。私たちが何を留意し、どのように環境を整えたらよいかということ、生活をともにしてから考えられます。例えば、粘土につい

でも、その扱い方、性格、子どもの反応などは、絶えず変わっています。集計だけで、また観察だけで（もちろんそれも大変必要とは思いますが）書物を書きがちな現在、なんとか、子どもと生活をともにした上での本が出来上がらないものかと願います。大変忙しい時代ですが、特に幼児教育者養成機関で教鞭をとられる先生方に、望みたいと思います。

・私は恵まれた自然の中にきて、初めて、自然の中で子どもの生活を知ることが出来たのですが、都会では大変経験したいことです。都会だけでなく、田舎でさえも、テレビののってくる文化生活に憧れ、自然の中にいることをわすれ、文化だけを受け入れようとする傾向があることも確かです。日本の風土の中にあつての幼児教育に今一度関心をもちたいものです。

日本の風土を知らなくて、これからの日本の幼児教育のあり方ということは考えられないと思います。そこで幼稚園の先生が実際に日本の風土の中で自然を主体とした生活をする経験が出ないものでしょうか。観光で訪れることではだめだと思えます。私の住んでいる近くに八甲田という開拓地があり、そこで農作業をしている青年の方の話を聞き、今更ながら、自分が自然を相手に真剣に生きたことのなかつたことを恥かしく思いま

した。一カ月でも二カ月でも幼稚園の先生が、そんな生活の中に入りこんで生活してみれば、広い視野で子どもをみることに出来るのではないかと思っています。

・次に、文部省の報告でなく、幼児教育をしているものが、現在ある表面的な報告ではなく、幼児教育の実態と現状といつものを全国的に捉えてみなくてはいけないと思います。出来ましたら幼児教育雑誌を扱っていらつしやる方々にお願い出来ないでしょうか。東京にいても、お隣の幼稚園とは全く異つた子どもの見方をし、ばらばらな扱い方をしています。また、どうしているかさえ知りません。

簡単でまとまりがありませんが、現在の私なりの考えを、子どもの生活を知ることから、ぎもんへそして願いと記してみました。幼児教育が、教師と学者と母親たちによって、日本で検討されていきますとき、間違つた方向に進まないよう願つてやみません。自分の幼稚園のあり方を真剣に今一度問い、今までの習慣にとられることなく、誤りを正しくみつめる機会を一人一人が捉えたいと思います。

教育的なチームワークのもとに、感情にとられることなく検討することが出来たらどんなによいかと思います。